

私が考えるグローバルイシュー  
—足りないグローバルガバナンス—

劉 高翔

東京大学

はじめに

各時代ごとに、その時代の性格を表す最も代表的なグローバルイシューがある。植民地支配、人種差別、核脅威、環境汚染など、あげられる例は山ほどある。時代の性格が刻まれたそれらの「イシュー」は、歴史を見るとときには欠けてはいけない要素であり、またその時代を知るための最高の切口でもある。

今の時代を見ると、確かに、格差問題や環境問題、民族紛争の方が我々にとってもっと身近で確実なものに見えるかもしれない。が、それらはあくまでも現在のシステムに内在する問題の表面的な現れであり、もう既に起こっている変革を前に、準備を欠けていてはそれらの問題は拡大するのであろう。そしてそれらは全て、グローバリゼーションと関わり、影響されている。この変革には、以前の歴史の中では克服できなかった問題を解決できるポテンシャルを持つ一方、下手をすれば更なる混乱を招く恐れもある。どうやってこの時代の変革を利用し、よい方面へと誘導するかが問題となる。世界舞台の役者たちが変わる中、グローバルガバナンスという言葉には、以前にはない困難が立ちふさがっている。つまり、これからの世界にとって最大なイシューとは、このガバナンスの仕方にあると私は考える。

グローバリゼーションで、パワーが国同士だけでなく、企業にも、個人にもシフトしているのだ。グローバリゼーションには多様多様なメリットが有る一方、2つの致命的な弱みもある。それは格差と不確実性であり、グローバル空間のガバナンスの欠如が原因である。この、グローバリゼーションにおける格差と不確実性を最小限に抑えることが、今最も必要とされるものである。これ以上格差が広まれば、いつかはグローバリゼーションの恩恵を分かち得なかった者たちが自分の生存のために立つだろう、これ以上不確実性が高まれば、いつかは救済のできない境地に落ちてしまうだろう。人類社会が発展するには、安定性を無視してはいけない、そのためのグローバルガバナンスとも言える。

ルーズベルト元アメリカ大統領はヤルタ会談の始まりごろにこう言った。

世界の支配なんて簡単だ。

極東は蒋介石にやれば、アメリカの援助で中国を支配していくだろう。

太平洋？ それは我がアメリカが頂く。

アフリカはインドルートの関係からイギリスに行く。

スターリンが欲しがっているのは、ソ連の安全保障だけだ。

もし私が彼に何でも与えて、その代償を求めずにおけば、

スターリンだって阿漕なことはしないはずだ。

しかし、世界は遥かに複雑となり、グローバルガバナンスも重要性を増すとともに遥かに難しくなったのだ。

## パワーシフト

現在世界は大規模な、しかも歴史的にはかつてなかった性格を持ったグローバリゼーションによるパワーシフトを経験している。ここ半世紀、もしくはそれ以上の間、世界はアメリカという単極世界の元で秩序を保っていたが、今は多極化しつつある。そのアメリカも、二十世紀の始まり頃に、ヨーロッパからパワーシフトし、ヨーロッパを凌ぐスーパーパワーとなった。しかしこうしたパワーシフトは常に動乱と、残念ながら流血を伴った。

今の世界のパワーシフトを見ると、まず、かつてのような国家間同士のパワーシフトもあるものの、国という秩序のある空間から、グローバル空間という未だにガバナンスが欠けている空間に移していることが分かる。これが私が言及した今のパワーシフトの異種な性格の一つである。その例として、中規模国家の国内生産額をも超える多国籍企業や瞬時に世界を変える金融マーケットなどがあげられる。ガバナンスが欠けている空間へのパワーの移りは、繁栄をもたらす一方、環境破壊や経済不況をももたらした。多国籍企業の資源の過度な採掘が原因の生態圏崩壊、金融投機による世界的不況など。

BRICS などが代表的な新興国の台頭はまさに伝統的なパワーシフトである。そしてこうした新興国の台頭はあるチャレンジをもたらした。それは異なる価値観との共存である。G8からG20になったように、世界はもはや価値観が共通し、お互いに認識のある先進国だけではどうにもならなくなってしまった。

さらに、パワーは個人個人にも移り始めた。コンピューター技術、通信テクノロジー、ネットワークイノベーションのお陰で、一人ひとりの発信力と影響力が増した。特にソーシャルネットワークによって起こらせたと言われているジャスミン革命が最も説得力がある。それ以外にも、企業の不公正なやりとりや政治家のスキャンダルなど、情報が瞬時に伝わる中、誰もが自らの言動に注意しなければならなくなった。インターネットによって、我々にある可能性が現れた。それは、教育の革新である。今の世界では、六人に一人は読むことも、書くこともできない人たちだ。そして、この約6億人の女性と、約三億人の男性は、ほぼみんな南アジア、アフリカ、中東の三地域に集中している。ネットを通じて、彼らは知識を比較的到低いコストで学べる事が出来る。彼らが声を持ち始めることは重要な課題であり、地域発展につながられる。

しかし、その一方、何者か意図的に偽りの情報を流したり、ネットワークが犯罪といった悪用に使われたりしている。極端的に言うと、世界は一人の人間によって混乱に導くことができるようになったのだ。

グローバル舞台のアクターたちの多様化に連れ、コカ・コーラなどの多国籍企業、NGO NPO、中国、インド、ブラジルを始めとする新興国、さらには経済的な側面に限らず、政治的な側面の統合も進めている EU のような国家連合などが加わり、国際政治も国内政治のルールも変えられざるをえない。もう既に、政府がどうこう自分で問題を解決できる時代ではなくなった。政府は無力になった、リーマン・ショックを見るがいい、格差を見るがいい、環境問題を見るがいい、そして何よりも、世界の「ベストアンドブライテスト」はもはや公的機関につかなくなったのだ。こうした、知恵、人材というパワーも大きくシフトしている。

### グローバルガバナンスを求め

国際会議やプラットフォームをもっと開けば解決できるという事でもない。代表的な、G20 や国連も、現在の地球問題への取り組みに関しては不十分なのだ。まずは、条約を結ぶ際の非効率性である。地球規模の問題は、環境にせよ、経済にせよ、時間が鍵となる。かつての先進国だけの G7 では、国の数が少なく、共同認識の多い集団であるため、条約は良い問題解決であった。しかしそれが今となって、価値観の異なるアクターが増えたことで、かなり非効率的になってしまった。市民との距離も、こうした国際会議の問題である。市民の生活を左右する政策づくりをしているのに、市民とは距離をとっている。これでは、グローバリゼーションに対する反感を起こしてしまう。更には、強い国だけが政策を作るというのも理不尽なところがある。グローバリゼーションの恩恵を広めるためにも、こうした国際会議では排他性を有してはならない。総じて、今の段階では、国際会議の有用性は減少しているといえる。

有効なガバナンスは、今後、垂直型ではなく、ネットワーク型となる。どうして、従来の形ではガバナンスがこうも難しいのか。それは、本来他の主体と比べ強いはずの政府や公的機関が、今や弱小しつつあることだ。もちろん、自由化や規制緩和は経済発展を促進する側面もあるが、ガバナンスが弱くなってしまっただけでは前述のとおり、様々な問題を引き起こしてしまう。物事を起こす力を、政府は徐々に失われている一方、産業界や市民社会にその力が回っているのだ。つまり、今後のガバナンスを有効にするには、従来のモデルでは到底限界がある。そして、個々のパワーをつなぐような、ネットワーク型の科学的なガバナンスが今後主流となるだろう。

### グローバルガバナンスの課題

#### 対貧困

二十パーセントの人々が商品やサービスの八十五パーセントをも消費しているような世界は、健全とは言えない。しかも、グローバリゼーションの恩恵を享受している先進国の人口は、世界人口の二十パーセントにすぎない。貧困は、医療、環境問題、内戦、テロ、人権迫害等様々な問題の元となる原因なのだ。もちろん、貧困は改善している。そしてその多くは、グローバリゼーションがもたらした貿易のおかげともい

える。しかし、格差が広まる一方、貧困は社会の最大な不安定要素である。

### **法律面**

法律面でのグローバルガバナンスがどのように国内法と合致するかが問題となる。知的財産や税制、貿易や投資、労働など、様々なものがある。法律面での摩擦を回避すべく、国際的な協力と監視が必要だ。

### **安全面**

今日の国家も企業も個人も、皆非常にデリケートなものとなった。かつての国家安全とは軍事力だけだった。しかし今となって、金融面、環境面、サイバー面、食料面が全て、敵の攻撃対象となりうる。9 1 1 テロ攻撃は世界のたった一つのスーパーパワーを恐怖に貶めたように、今の主体は皆脆くなっているのだ。安全面でのガバナンスは必要不可欠である。

### **最後に**

より公平で効率的なグローバルガバナンスを我々は必要としている。それを模索する中、様々な困難に出会うだろうし、革新的なアイデアは受け入れられないときもあり、既存の利益者の阻害に遭うのだろう。しかし、歴史的に独特な時期にある我々は後世によりよい世界を残すこの機会を見失ってはいけない。私はそう信じている。

### **参考文献**

J.F.リチャール『問題はグローバル化ではないのだよ、愚か者！』 草思社 2003。

細谷千博『国際政治経済』 有信堂高文社 2008。